

**巻頭言**

## プロジェクトXを求めて

村 良 平



最近の電力危機といえば、カリフォルニア州での度重なる停電騒ぎを指すが、我が国でもかつて「忍び寄る電力危機」と騒がれていたことがある。バブル経済の絶頂期が過ぎた平成3年頃、旺盛な電力需要の予測に供給が追いつかないという危惧からだった。しかし、不景気に喘ぐ今日ではそのような心配はほとんどない。それよりむしろ、プロジェクトの枯渇に伴うOJT機会の減少がもたらす技術の空洞化やエンジニアリング・スピリット萎縮の方が気になる。先行き不透明な時代にあって、技術者の責務と針路を見失わずに生きて行くことは結構難しい。

不況のため電力需要は伸び悩み、大型の電源開発は軒並み遅延か凍結状態となり、景気対策の切り札となるはずの電力設備投資もすっかり冷え込んでしまった。加えて電力自由化の流れに沿ったIPP（Independent Power Producer、独立系発電事業者）電源による新規参入や分散型電源の進出により、電力会社は必ずしも自社設備を増す必要はなくなってきている。もしこの状況が今後も続くとするなら、建設を前提とした技術要員は一体どこへ行けば良いのか。綿々と続いた自前主義からの脱却傾向は電力技術者に決定的な意識転換を強いている。

アウトソーシングとの競争に晒される羽目となったいわゆるインハウスエンジニアにとって「市場価値のある技術」とは何か、「競争に打ち勝つ優れた技術」を持っているかが問われ始めている。これまでの「市場価値で測れない独自の技術」とか、「他に委ねることが出来ない、つまり事業者自ら責任を負わなければならないこと」を考えていれば良かった時代とは様変わりである。改めて今一度、インハウスエンジニアが果たすべき役割と軸足の置き方について、基本に戻って自己分析する必要がある。

真の価値とは失ってみて気付くものかも知れない。予定していた開発計画が遠のき始めた現在、つくづくそう感じる。エンジニアリングの本質や発展過程を思えば、プロジェクト抜きに「技術の粋を極める」など及びもつかない。技術、経験、人材はプ

プロジェクトを通じて磨かれ、獲得できる。調査・計画から維持管理・運営に至るまで首尾一貫して初めて総合力が涵養される。また、自らが主体的に関わるからこそ敢えてリスクを冒してまで技術開発に挑戦しようとするものである。こうした当たり前のことが今やりづらくなっている。

この先、活路を見出せるか否かはまさにわれわれの思いと行動にかかっており、その心構えや危機意識の持ち方が技術者や企業の将来を大きく左右する。状況の好転を受身で待つことではなく、積極果敢に夢を追い求めて前進することであろう。それ故に、個人にとっても組織にとっても遣り甲斐のあるプロジェクトが望まれる所以である。

21世紀には情報技術（IT；Information Technology）革命やグローバル化が進展し、社会経済はますます早く変化するといわれる。ITは情報入手費用の劇的な低下を通じ、競争促進の環境を生む。しかし、技術革新の加速は企業や個人が保有するノウハウや特定の技能の寿命を間違いなく短縮させる。仮想的現実の下で展開される活動が大きなウェートを占めるようになると、現場離れや技術軽視の風潮など由々しき事態すら生じかねない。事実を把握する眼力、粘り強く分析する知力、良いものを生み出す意欲といったエンジニアの美德と目されるものは、営々と築き上げてこそ身に付くものである。効率化とスピード化を重視するあまり、それらを犠牲にしては元も子もない。だからこそ、時間をかけて次世代を育てるという体制を保持し、人の喜び・痛み、悔しさを自分のことのように共感できる、豊かな人間性を持った人材の育成がますます大切となる。

今TV番組「プロジェクトX～挑戦者達～」が面白い。金や名誉のためでなく、ひたすら前人未踏のプロジェクトに挑戦した無名の人々の物語。人は夢を抱き夢に駆り立てられる時、途方もない力を発揮する。それが観る者を感動させ、胸を熱くさせる。われわれもまた、それらに匹敵する夢を育んでみたいと思う。新たな「プロジェクトX」を求めて。

もちろん、それは「重厚長大なるが故に尊い」とする従来の価値論から想起されるものでないことは明白であろう。